

## テーマ 「修学旅行における自己発見」

コーディネーター 亀井 浩明 帝京大学名誉教授  
パネリスト 新山 雄次 文部科学省初等中等教育局児童生徒課課長補佐  
野原 明 文化女子大学附属杉並中学・高等学校校長  
宮地 信良 有限会社自然計画代表取締役  
吉田 新 近畿日本ツーリスト株式会社立川支店課長

亀井 本日のテーマは「修学旅行における自己発見」ということでございます。

北千住へ行きますと、ここは芭蕉が奥の細道に旅立った場所だということを紹介しておりますが、芭蕉は世のしがらみから離れて、自分自身の生き方を見つめようとして旅に出たのではないかと私は思います。

日本人は旅が大好きなようで、たくさんの方が旅に出て、そして自分の生き方を考えたというような歴史がいっぱいあります。新しい修学旅行と自分自身を静かに認める機会として旅のよさを大事にしつつも、同時に新しい旅、多様な体験というようなことが近年言われておりますので、そういった方向で新しい旅のあり方を会場の皆様とご一緒に、パネリストを中心に考えていきたいと思っております。

シンポジウムというのはギリシア語のシンポジオンといって、お酒を飲んだときに酒ばかり飲んでいておもしろくないから、何かここでやろうよといって、そこで討論を始めたのが元来の語源で、人に美辞麗句でさんざんしゃべらせた人を、ソクラテスが最後にどんでん返しをするというのが、このシンポジオンの楽しみだったようです。ぜひパネリストに言わせたいことを言わせておいて、最後にひとつ、どんでん返しをやっていただきたいと思っております。

それでは、新山先生からひとつお願いしたいと思っております。

新山：新山と申します。私の旅の思い出ということをお話をさせていただきます。

10年ほど前になってしまいますが、転勤で福島県に赴任をする時のことでございます。初めての地方勤務ということもあり、上司から赴任先として希望する地域を参考に聞かせてくれと言われましたので、私、生まれが四国なものですから、今まで経験していない東京より北の地域と答え、福島に赴任することになり、期待感を持って赴任いたしました。

家族で赴任した2年間は休みには車で出かけ、地元の方にお勧めのスポットを聞きながら1

00以上ある温泉を順々にめぐったり、また山登りに誘ってもらったり、充実した期間を過ごすことができました。

自然に触れる機会にも大変恵まれました。4月の終わり頃から花見の季節に入りますが、花見山というのが近くにございまして、全山が花で埋もれている見事な眺めを見たり、梅と桜と桃がいっぺんに咲くことから3つの春ということで三春町と名づけられたところにある滝桜を見たり、5月からは桃源郷を思わせる桃の花、6月はミズバショウの原生地、夏は裏磐梯の五色沼や尾瀬の美しさを満喫し、また山が大変多い地域なので、虹を見ることが大変多く、とても印象的でした。ソバの味と喜多方ラーメンの味も忘れがたい思い出になっております。

何より家族の財産になったのは、福島の方々との触れ合いということです。会津の地方に会津の三泣きという言葉がございまして、初めはとっつきが悪さに泣くということ、その後は情の厚さに泣いて、最後は別れづらくて泣く・別れがたくて泣くという意味だそうです。私たちが東京に戻るときも、近所の方々が集まってくださって、歌まで歌っていただいたことに夫婦して泣きましたし、また職場での最後の日も同じような状況でありました。

亀井 それでは野原先生、よろしくお願いします。

野原：野原でございます。私はもともとジャーナリストでございまして、皆さんの中にも私の顔を見て、見たことがあるぞと置いていらっしゃる方もあるかもしれません。NHKの解説委員を18年ほどやってまいりました。もともと記者でございます。

そういう関係で、いろんな旅をしております。取材の旅などたくさんしてきました。今日は中学校の修学旅行の話をしたと思います。

私が中学校の修学旅行を経験したのは昭和25年でございます。そのころの修学旅行といえますと、食べるものがないんですね。私は大阪の師範学校の附属中学校だったんですが、その頃にしては大変贅沢な修学旅行で6泊7日、九州へ参りました。それだけの旅をするには米を持っていかなくちゃ、どこへ行って泊まっても食料が出ないんです。したがって全員がお米を持って修学旅行に行きました。

最初に船で別府へ参りまして、別府の旅館で最初の晩ご飯の時であります。ご飯が並べてあるところに空のどんぶりが1つありました。そしてちょっとぐずぐずしていた生徒が、自分のご飯がないという話になりました。

そのころは1杯のご飯というのは大変な問題でございまして、旅館側は言われただけのご飯を全部出したというんですね。

先生の方は生徒を信用していますから、そんなわけではない、旅館と先生との間でたいへん険悪になりました。結局、私のクラスの男子生徒がこれはどうも余っているらしいぞということで、

食べてしまったものです。しばらくして、ちょっとぐずぐずしていた生徒が食べたということがわかって大変でした。

貴重なご飯を勝手に食べるとは何事だということで、その晩は私のクラスの男子生徒全員が外出禁止ということになりまして、別府の夜は全く見ないということになったわけでありませう。

それから何年か後に後輩の話から、もう、だんだん食料事情がよくなってまいりますと、旅館で出たおかずを、こんなまずいものは食えるかと言って残す者が、どんどん出てきたということを知って、私は大変怒りの気持ちを持ったわけですね。修学旅行の中で食べ物をめぐっての先のようなことが起こったということは、恐らく今の子どもさんたち、あるいは先生方にも想像がつかないんじゃないかと思ひます。

最近の修学旅行においても、食べ物についてもう少し厳しい姿勢があってもいいんじゃないかということをおもひ、私は自分の学校の修学旅行では厳しくおもうておひます。今、世の中、甘くなりすぎているんじゃないかという感じがいたします。

亀井 では、宮地先生、よろしくおひます。

宮地 宮地でございます。私はネーチャーガイドの仕事、あるいは自然の調査の仕事をおひます。旅の思い出ということですが、最近はなかなか純粹に旅をするということが少なくなりまして、どうしても仕事のおことが頭の片隅に残っておひまして、どうやったらこれは自分のところで取り入れられるだろうかとか、そんなふうなことを常におおもひている中で1つ海外旅行の思い出があります。

2年ほど前にフランスに行きました。南フランスの方を回ろうということで、レンタカーを借りまして4日間ずっと自分で運転しながら回りました。フランスというのは、非常に車のスピードが早くて、普通の道路で70キロ、高速道路で140キロぐらい出して、かつ、左ハンドルで右側通行ということで、慣れないレンタカーの旅でした。3日目ぐらいでしたか、ある民宿に泊まり、朝、そこをチェックアウトして、次のボルドーに向かって行ったんです。100キロぐらい車を走らせてから、ポケットに手を入れてみましたら、その民宿の鍵がポケットに入っているんです。「ああ、これは困った。鍵を忘れて持ってきたと。まあスペアキーはあるだろうから後で郵便で送り返せばいいか、いや、そうもいれないかもしれない。もしかしたら迷惑をかけるかもしれない」というようなことで、葛藤をしましたが、きっと日本人というのは皆そうなんだというふうにおおもひられるだろうと思ひまして、戻って鍵をその民宿に返しに行きました。

その民宿のおばさんは、「まあ！そんなところまで行ったのに」とびっくりしたり、喜んでくれました。日本人の信用を失わないで済んだかな、なんかこういうのがもしかしたら愛国心と

いうのかななんて思いましたけれども、そのようなことでその日は時間が大分遅くなってしまいました。ポルドーの方に近づいていきましたらもう夜、真っ暗で7時、8時になってしまい、ホテルが見つからないんですね。予約はしていないんです。その場で行ってどこかへ飛び込めばいいやということで、レンタカーの気軽さで行ったんですが、真っ暗中にぶどう畑ばかりです。8時半ごろでしたか、ようやく寂しいところに1件、小さな民宿がありまして、今からだけれども、食事はとれますかと聞いたら、いいですよということで快く迎えてくれました。食事もつくってくれ、それがとてもおいしかったのです。

波瀾万丈の1日でしたが、そういう予期しないことがその日はいろいろ重なりました。海外旅行は多かれ少なかれそういうことがつきものかとは思いますが、そういう予期しないことを経験したというのが、私にとっては最近の旅では一番思い出に残っています。

亀井 どうもありがとうございました。 それでは吉田先生、お願いします。

吉田 私も仕事柄、旅はしょっちゅうしておりまして、あくまでも添乗員という立場ではありますが、年間大体80日から100日ほど家を空けている状態です。旅をしていつも思うんですが、旅は人だな、と感じております。

一つ例を挙げてお話しさせていただきます。岩手県に遠野という民話のふるさがあります。私がお世話になっている学校で、毎年この地を訪れ、昔話の語り部のおばあちゃんにお話しをしていただいています。この学校は20年近くにわたりこの地を訪れ、このおばあちゃんの話聞く修学旅行をしています。

そのおばあちゃんへの予約の電話連絡は、旅行会社の私がしています。毎年7月の修学旅行でして、ある年の3月におばあちゃんに連絡の電話をいたしました。ところがおばあちゃんはご家族の方によりますと、病気をされたとのことで、しゃべること、歩くことすらできない、という状態だと伺いました。

私は、7月の修学旅行にきっと間に合わないだろうなと思いつつも、おばあちゃんのところに毎週のようにお電話で、生徒の皆さんが待ってるよ、今年もおばあちゃんの話をお聞きしたいよ、ということをお申し上げていました。

5月になり、遠野から1本の電話が私のところにありまして、「吉田君、君はおばあちゃんに何を言ったんだ」と、関係者の方がおっしゃいました。伺ってみますと、7月に修学旅行で話をしなさいいけない、生徒の皆さんが待っているんだということで、かなり懸命なりハピリをされておられたようでございます。

7月の修学旅行になり、おばあちゃんはたった1話の短いお話でしたけれども、とても心温まるお話をしてくれたのです。以前のように言葉も流暢でありませんでしたし、ところどころ

聞きづらい部分もあったかとは思いますが、本当に温かいお話でした。

それから8年たちましたが、そのおばあちゃんは、今でも現役の語り部としてお話をしてくださっています。また来年もおばあちゃんの話が聞けることを、恐らく先輩から聞かれた後輩の生徒の皆さんや先生方、私も楽しみにしています。やはり旅行というのは、いろんな人が支えてつくっているなど、あらためて感じたものでございます。

亀井 皆さんに一通りお話しいただきました。

4人の先生のお話をお聞きしながら、1つは人情、人との出会い、もう1つが躰、ルール。

新山先生から涙の別れのお話がありました。吉田先生からは人との出会い、遠野のお話をするおばあさんの人情あふれる話がありました。宮地先生から、鍵を100キロも持って返すという話がありました。野原先生から昔の食べ物、そして今の子どもたちに対する修学旅行にあたっての指導、躰の問題がありました。

それでは今の子どもたちに関して人情としつけ、その辺のところでお話をさせていただければと思います。

宮地先生お願いします。

宮地 私もガイドの仕事を通じて子どもさんと接しているわけです。人情というのとちょっと違うかもしれませんが、私が子どもと接するということは自然の中に一緒に行ってそこで自然解説をするということではなくて、自然の中に入って、一緒に入って体験をしたり発見をしたりするということをするわけです。帰りがけに子どもと別れる時に、「さようなら」と言って別れてくれる子どもと、シラッと別れる子どもとがあるんですね、同じようなことをやっているつもりなんですけれども。

「さようなら」と言ってくれる時というのは、その体験がとっても子どもにとって印象深かった時のようなんですね。体験が深いということになると、人情が移るといえるのですかね。僕はガイドですけれども、そういうところに連れて行ってくれたということで僕に対してもそういう気持ちが高まってきて、別れが惜しくなるのかなと感じます。

逆に、子どもが日常を引きずったまま自然の中に没入できない中で終わってしまったような時は、シラッと別れ方をするのではなからうかとそんな気がいたしました。

亀井 なるほど、大変いい話でした。新山先生、いかがでしょうか。

新山 中学2年生の夏のときに、小グループの旅行に参加したことがございます。私は松山の出身でして、中学校の時代から東京に出てきて寮生活をしておりました。帰省した夏に旅行に行かないかと地元の先生に誘われ参加したことがございます。

引率してくださる方というのが私の家に何回か来てくれて、膝詰めで話していただいたこと

が、大変印象に残っております。

その中身を紹介しますと、「新山君、学校で日ごろ4時間の授業を受けていて毎日午前中帰れた人が、きょうは6時間ですと言われたときどう思うだろうね」と言うのですね。「とても苦痛を感じるんじゃないかな。」「逆に日ごろ6時間の人が4時間になったらどう思う。とても嬉しいと感じると思わないか。」「これはね、どういうことかということ、日ごろ苦勞している人はその分喜びも大きいんだよ。」こういうふうに言ってくれたんですね。苦勞を避けてはいけないんだということを言って下さったのです。

また、日ごろの問題意識も非常に重要だよという話も下さいました。ディズニーがミッキーマウスを発見といいますか、思いついたときとか。座標というのも実はクモの巣から発見されたんだとか、そういった話をして下さいながら、日常の問題意識というのはすごく大事なんだよ、だから散歩ひとつにしても、問題意識を持って歩くと全然違うんだという話を丁寧にして下さったのです。

私は先生の人格というのに触れ、すごくその話が印象に残っていて、しかも私にとって大きなインパクトを与えてくれたと思っております。私の中学校、高校の恩師の先生も、「疑問を持つ人は成長する人だ」とよく言って下さいました。こういった先生との触れ合いの中で、私が本当に触発を受けた経験として残っています。

亀井 疑問を持つ人というのは、きっと後でテーマになってくると思いますので、その時またお願いします。

私も修学旅行についての思い出を一つ申し上げたいと思います。今から62年前の修学旅行ですか、そのときに、私はいつもトンチキで物を忘れるくせがあって、あるところで昼食を食べたときに、傘を忘れたんですね。そうしたら担任の先生が、走って取りに往復小一時間もかけて傘1本を、当時物がない時代ではあったとはいえ、とても大変だったと思いますが、取ってきて下さいました。先生には、すごく感謝しているところであります。

それでは野原先生。

野原 修学旅行とは関係ない話ですが、私の学校は高校の修学旅行でパリへ行っているんですけれども、最近は随分若い人までが海外旅行に出かけるようになったようです。私が初めて海外に行ったのは30代半ばだったと思いますが、それ以後、たびたび、海外へ出るようになったものですから、個人、またときには家内を連れてツアーに参加したこともございます。その中でやっぱり旅というのは、人との触れ合いというのが非常に大事だといえます。これは全く皆さんのおっしゃるとおりだと思います。本当にいい添乗員の方と触れ合ったときには、やはりこの方といつまでも文通だとか、その後もお会いするといようなことが続いております。

またこんな経験もあります。同じツアーのメンバーの方がご自分の将来、あるいは仕事、家族との関係で大変悩んでおられ、私のところに相談に来たり、それがずっと続いたこともございます。やっぱり10日間とか、1週間とか一緒にいることによって、その人の人柄を知る、あるいは信頼でき、そんなことにつながっていくのかなという思いがし、それは旅の一つの特徴というふうに申し上げていいのかなと思います。

亀井 寝食をともにすることの大切さなど、これはきょうの底を流れる理念かなというふうに思います。また海外旅行の問題は、今後の修学旅行をどうするかという重要なテーマになってくると思います。

それでは吉田先生お願いします。

吉田 人との出会いというお話についてはおもしろい話がありまして、やはりこれも同じく岩手県に中学生を連れていったときのことです。中学生が私のところにきて「吉田さん、ここではいくら払ったのか、ここでは何円かかったのか」ということをしきりに聞くんです。

なぜ、そんなことを尋ねるのかと聞きましたら、この人たちは皆、私たちに親切すぎる。きっとお金をたくさん払っているに違いないと。

生徒さんのために親切に接していることは、生徒さんの心に届いているんだなというふうに感じました。その生徒さんは、「東京ではそんな周りの大人に親切にされたことがない」と私に言っていました。とても印象に残ったことでした。

亀井 旅についてお話しをしていただきましたが、徐々に具体的に修学旅行はどうあったらいいだろうかという方向に移りたいと思います。

人間関係の大切さやルールとかしつけの大切さということもございました。次に新しい修学旅行のあり方という方向で、できれば体験というところを絡めながらご発言をお願いします。

では、また新山先生から順番にお願いします。

新山 体験的学習あるいは体験活動ということで、文部科学省で今進めている事業で「豊かな体験活動推進事業」というのを、全国の約100の地域で700校ぐらいを推進校に指定し、モデル校の実践に取り組んでいただいております。これは年間7日間以上の体験活動に取り組んでいただくというものです。

体験の一つの魅力というのは、本物に触れるという点だと思います。先日、本で三現主義という言葉が紹介されておりました。これは電機メーカーのトップの方が常に言われている言葉だそうで、現実・現場・現物ということで、それを社内に徹底しているというお話でした。

体験活動の重要性というのも、この3つに一つは集約されるのかなと、現場で現物を現実に触れる。こうした体験が子どもの成長を豊かにするのではないかと思います。

例えば1回訪問したところがテレビに映ったりしますと、当時のことが思い出されて懐かしく思いますし、またたとえ場所の説明がなくても、訪れた感覚というものがあるって、確かあのときはこんな景色だったとかが蘇ってくる経験を皆さんお持ちだと思うんです。多分、五感全体で雰囲気自体を体験しているからだと思います。逆に実際に訪れていない地域だったとしたら、こんなことは無理だと思います。

亀井 それでは順番に、よろしくをお願いします。

野原 ちょっと理屈っぽいことを申し上げますが、修学旅行というものは、やっぱり修学ということと旅行ということにわけて考えてみる必要があるだろうと思います。修学旅行の起源は、明治19年の2月に当時の東京師範学校、後の東京教育大学になる学校ですが、この師範学校の先生と生徒120人が、2月の寒い中、11日間、千葉県下に長途遠足、すなわち長い道のりの遠足をやったことなんですね。

そのときのねらいは、兵式体操、つまり軍隊式の訓練をやるということでしたけれども、そのときの師範学校校長は、「その長途遠足をするゆえんのもの、路上至るところに便宜を求めて小学科を実地に研究せしめんとするにあり」と。

つまり軍隊式の演習だと言っているながら、実はいろんな便宜を求めながら、いろんな実地的な体験的な勉強をさせるということを出発をしたのです。

その後もずっと文部省は、そういう教育的な勉強を目的にやるのが修学旅行だというふうに言ってきたわけであります。

ところが戦後になりだんだん変わってまいります。学習指導要領ができて最初の30年代は学校行事の中の遠足というふうに言っていた。それが40年代になって、修学旅行的行事、50年代になると旅行的行事、そして今は、旅行・集団宿泊的行事という言い方になってきている。つまりその修学の部分が少しずつ薄らいできて、旅行的な意味合いが濃くなってきているんじゃないかと思います。

それに対する反省として、近年体験的な活動が非常に重要だということが言われるようになってきたと思いますが、やはり修学旅行ですから、そういう体験的活動の重要性はもちろんあるけれども、一方にやはり旅行の楽しさというものがなければ、生徒たちは思い出には残さないだろうと思います。

体験的活動にはいろんな種類があるだろうと思います。例えば、想像もしなかったのを見たり体験したりするというものもあるでしょうし、もう1つは、初めから自分たちで予定をしていたのを見たり体験をするというものもあるだろうと思います。

いずれも重要であります、それがきちんと生徒の記憶の中に残るのかどうかというところ



が、非常に重要であろうと思います。

先ほど私は中学校の時の修学旅行のお話を申し上げたのですが、九州へ行ったときに、三井三池炭坑に参りました。あの三井三池の50～60メートルある三川坑と言われる一番大きな坑口の中まで入れてもらいました。そのときの私自身の強烈な印象というものがいまだに残っています。その後、三井三池の大争議が起こったり、あるいは大爆発の事故が起こったときに、あのときに見たあそこだとことで、後々まで非常に心に残ったという、そういう経験を持っております。

きちんと計画し、自分たちで考えを持って見に行っているのと、ただ連れて行かれて見たというのでは、ずいぶん違うと思います。

私も長崎の原爆資料館に生徒と一緒に何回か行きましたが、先ほどのような被爆した方の体験談を聞いて、そして入っていった生徒の見る目と、そうじゃなくて、ただ長崎へ行ったから原爆資料館を見るんだという、それだけで入っていく生徒の態度は全く違う。私は、生徒を引率し、しばしば入り口で番をしていることがございますけれども、そのときにどこかの高等学校の生徒がダーッと入ってきて、ダーッと出ていった。資料館の中をそれぞれ5分か10分で駆け抜けていったというような例をいくつも見ております。やはり体験的活動をやる以上は、何をなぜ見るのか、どういう意味があって見るのか、ということぐらいの準備をして行ってもらいたいということを強く感じています。

亀井 だんだんと具体的な修学旅行の方向性に行っております。宮地先生よろしく願います。

宮地 今、野原先生から準備というようなお話もありましたが、私も子どもさんと一緒に自然の中に入って感じるがあります。それは、ただ東京からポッと日光に来て、自然の中に急に入っていても、これはなかなか切り替えが出来ないんですね。最初のうちは、やっぱり話していることが「クラスの何とかさんがどうしたとか、やれ携帯電話がどうしたとか」そういう日常を引きずって自然の中に入って来るわけです。そのまま、自然に出てしまうと、これは何の体験にもならないと思うんですね。何が大事かということ、本人が体験を自分のものとして受け入れる素地があるかないか、ということだと思うんですね。

お米をつくるというときには、まず田んぼをつくれと言いますが、体験をした意義を得るには、体験する側に受け入れる体制ができていないと、上滑りをするだけで終わってしまうんじゃないか。そのためにはどうしたらいいかということですが、私の場合には、自然の中に連れて行く前に、まず「今から、2時間、3時間、自然の中に入りますよ。きっと皆、友だちのこととか学校のこことか、いろいろ頭の中にあるだろうけれども、とりあえず2時間、3時間はそ

れを忘れて自然の中で一緒に過ごそうね」というお話をします。「ここは熊とか猿とか鹿が住んでいる場所なので、熊にちょっとお邪魔しますよということで入りましょう」と、そういうことを言って、最初のうちは私がおもしろいものを見つけて子どもと一緒に観察をします。そうすると、子どもが寄ってきて見る。そのうち、今度は自分が見つけるようになります。そうすると他のもう1人の子どもが見つけて、何か見に行こうねと言って皆で見に行く、今度は別の子が別のものを見つける。子どもは本当に僕よりずっとたくさんものを見つけていきます。

特に低い土の上に落ちている虫とかキノコとか見つけるんです。終わった後で、子どもに「どういことがきょう一番おもしろかった」と聞くと、まずほとんどが「恐かったこと、ドキドキしたことがおもしろかった」と返ってきます。

また川があって、橋がないところがあるんですね。そういうところは石を飛んで渡ったり、靴を脱いでジャブジャブ渡ったりする。あるいは急な坂道のところで、余り私は整備された道のところはなるべく行かないで、昔の踏み跡のようなところを歩いたりするんですけども、そういうところに木が倒れていて、それをくぐったり、滑って落っこっちゃったり、そういうところを歩いたのがおもしろかった、とほとんどの子どもが言います。

ですから、今の子どもは日常の中でそういう体験がものすごく不足していて、非常に狭い中で生きているんじゃないかと思うのですが、それ故に山に来て実際怖い道を歩いたり、川を渡ったりという、そういう体験のおもしろさですね。そういうことが修学旅行という非日常の世界だろうと思うのです。

亀井 宮地先生、夜、天体観測というのはやるんでしょうか。

宮地 それだけ取り上げてはやりませんが、夜、暗闇の中を歩くというのはやります。真っ暗な時もありますし、月が出ていて明るいときもあります。天気がいいと戦場ヶ原なんかですともう満天の星が見えるのです。秋の寒い日なんかですと、小さい星もはっきり見えちゃうんですね。もう満天の星と言う表現がぴったりです。

亀井 今、満点の星と言う話がございましたが、今から200年前の1804年にカントが2月12日に病没し、こしは200周年になります。ヨーロッパではカントのお墓にたくさんの人、ドイツの外務大臣もカントのお墓に花を捧げに行っているんです。これは天声人語にも載っていました。そのカントのお墓にこういことが書いてあるんですね。実践理性批判の終わりの章の書き出しの文言なんです、「私が生涯にわたって感嘆し崇敬してやまないものは2つある。1つは我が上なる満天の星空ともうひとつは我が内なる道徳法則と」。前段が今、宮地先生がおっしゃった我が上なる満天の星空というのがカントの中に書いてある有名な文言です。ご参考に申しあげました。

では、吉田先生、いろいろご計画をなさるときに、いろいろご腐心があると思いますので、それも含めてどうぞ。

吉田 修学旅行で2泊3日、3泊4日のコースを行けば体験学習が入っていないコースはほとんどありません。やはり、体験学習というのは、通常のきれいな景色を見たり、また古い建物を見たりいうだけでなく、人が関わって人が成し得ることでございます。その道を極めた人から、その人だからこそ知っていることを聞く、あるいは見る。そういったことは普段の生活にないことであろうと思ひまして、私どもでもお勧めしています。

特に修学旅行は団体旅行ですので、家族旅行ではできないような体験を中心に生徒の皆様に提供できるように、常日頃からコース組み等の研究をしております。

亀井 これまた非常に重要な視点かと思ひます。

それでは「これからの修学旅行のあり方」についてそれぞれご発言をいただき、その後、参会者に感想、要望、質問等を出していただきましょう。はじめに新山先生

新山 それでは私の方から先ほどの豊かな体験活動推進事業に関しまして申しましたが、地域間交流推進校モデル校で事業を推進すると同時に文科省の方で研究会を立ち上げ、全修協さんにも委員にご参画をいただいて今中間まとめをしているところでございます。

研究会の中で委員の先生から指摘のありました1つに、今の子どもたちは人との関わりが不足している、家でお手伝いすることがまずない、親から注意や指導を受けることがない、他者とのコミュニケーションにも不足している、また話の量だけではなくて、例えば相手の顔色を伺うとか、喧嘩をするなど心がぶつかり合うことが大変少なくなっている、それから地域社会との関わりが希薄である、ということがあります。

先ほど吉田さんの方からも、体験については人との関わりが必ず出てくるとおっしゃっていましたが、体験活動行う場合には、地元地域の指導者からご指導いただくということになりますので、人との関わり、また地域社会との関わりを深くすることになりますので、体験活動がそういう意味で大変重要な機会になると思っております。これからの修学旅行を考える場合も、そういった人との触れ合いと関わりなどを通して、その方の生きざまとか生き方、また人生を教わる機会として捉えていくことが大事かと思っております。

亀井 人との関わりは、恐らく、21世紀で最大の、地球上の人類の一番重要な課題だというふうに思いますが、それでは、野原先生。

野原 新山さんとは、ちょっと違った視点でまたお話をしてみたいと思ひます。修学旅行を決める際、行先を決めるに当たって、やはりその旅行の目的が何であるかということ、やはり明確に固めていくといひますか、同時に生徒にも理解をさせていくということが、まず最初

に必要なことではないだろうかと思います。その中に初めて体験的な活動をどこでやるのか、あるいは学びを深めるための体験というのは、一体どういう体験なのかというふうなことを考える。

先ほど原爆資料館を駆け抜けていく高校生という話をしましたけれども、これなんかはそういうものが明確でないために、ただそこへ入っていった、何か気持ちが悪いよ、というので駆け抜けてしまうことになるわけです。

その学びを深めるための体験をするために何が大事かと言えば、やはり私は事前の準備であろうと思います。事前に行く先のいろんな事物、事象に対する関心を持ち、そして事前の学習によってそれを深めていくということが必要であると思います。

たまたま私の学校は、今、高校がパリへの修学旅行をやっていますが、文化女子大学という大学の附属である学校でありますので、フランスの美術、あるいはフランスのファッションという現物を、あるいは歴史的なものを見ることによって、どのような感銘を受けるか、感動を受けるかということを1つのねらいとしてパリ旅行を始めたわけです。したがって、事前の学習というものに非常に力を入れています。

その旅行の中に大きな要素としてルーブル、あるいはオルセーなどの美術館、博物館を見るというが入っていますが、ただ、ルーブルとは何だとか、オルセーとは何だというふうな考え方をとるのではなくて、もう少し具体的にいろんな事前の勉強をさせている。例えば国語の時間に清岡卓行さんの『手の変幻』という作品がありますが、その作品の中にはミロのビーナスについて書いた部分がございます。そういう文章を読むことによってミロのビーナス、あるいはそれ以外の美術品についても考えるチャンスをつくるのです。

『旅行風景の映像が写し出されるその中で、ミロのビーナスについて書いた部分、このニケの像についての文章を紹介する。』こういうまあ、文章を書いているわけですが、このニケの像を生徒たちに見せ、これをどう感じるかということを書かせます。このように事前にある程度学びを深めるような準備をさせておくということが、非常に大事だと考えておりまして、本校では美術、あるいは英語、あるいは社会、社会といいますが世界史、そして国語等々、あらゆる教科の中でそのパリへ行って見るであろう、経験するであろうことについての準備をさせるということをやっています。

これが結果的に、そこで得るものが非常に大きいんじゃないかと思います。最終日になって、私のところに生徒が、校長先生、何とかもう1日延ばしてくれとってやってまいります。それほどに生徒たちはさまざまな感銘を強く受けてパリ旅行というものを意義のあるものに行っていると私は感じています。同時に修学旅行をやるにあたっては、無理のない日程とか、かかり

すぎない費用という問題が出てくるだろうと思います。この辺は学校と旅行会社さんの間のいろんな話し合い、交渉の問題になってくると思いますが、こういうところも非常に大事だろうと思います。そして、外へ出るわけでありますから、これは国内、国外に関わらずやはり安全性という、つまり危機管理の問題、これについては学校がどれだけ十分な配慮をしているかということが、非常に大きな問題として出てくる。特に海外旅行の場合、これはもう生徒の生命に関わる問題ですから、この危機管理の問題については相当の準備、相当の覚悟をしなければやれないと思っております。

亀井 野原先生の話で頭に浮かんだことがありました。私、高校の歴史の教師を18年やり、その中で修学旅行の指導もやったんですが、事前指導は「こういうふう感じなさい」というところまで教えちゃいました。現地に行ってただ先生の言ったのを確認するだけなんですね。野原先生のお話のように、事前指導をそういうふうにするべきだったのを、今になってもう遅いんですけども、反省しております。

それでは宮地先生。

宮地 今の野原先生のお話や亀井先生のお話にも関わるんですけども、やはり事前学習、調べ学習というのを大体の学校は、やってくるようですが、そのやり方が非常に大事なのかなと思います。

往々にして、例えば日光であれば子供たちに「鹿の問題、鹿の食害の問題があるよ。それではそれを調べようね」ということで調べてくるんですが、答えを持って来るわけですね。来て現地で確認する。「なるほど木が喰われている」で終わってしまうんです。そうでなくて、では、どうして鹿がこんなに増えたんだろうとか、どういうふうにして、これからやっていくつもりなんだろうとか、そういう疑問とか課題とか、そういうものを持って現地に来てもらいたいなと常々感じております。

答えを持ってくるのではなく、疑問を持ってくるようにするのが、事前学習じゃないかと思えます。

それから体験学習ということがテーマですが、見ておりますと、体験にまで至らないような、体験ごっこと言ったら言い方が悪いんですけどもあります。木を植える植樹体験というのがあるんですが、どれだけ植えたかと言うと1本だけ。これは植樹祭じゃない。1本だけ植えてどういう意味があるのかなという気がします。やるんだったら、本当にここを緑にするんだということで、たくさん植えてもらいたいし、植えるだけじゃなくて下ごしらえもしてもらいたいし、できれば苗をどこから持ってくるとか、もっと1つのことに対してもう少し深くやっていただきたい。ちょっとした形だけでは、これは体験学習じゃない。もう少し事前の準備な

り、そのときの体験にかける時間なりを考えていただいて、深みのあるもの、やる意味のある体験というのを、ぜひやっていただきたい。

亀井 ありがとうございます。

それでは、吉田先生、いろいろ計画するのは大変でしょうけれども、どうぞ。

吉田 やはりこれからの修学旅行では、最初、新山先生からお話がありました、やはり本物に触れるという機会をいかに持てるかということが、重要かと思っております。

逆に言えば地域の協力を得て、地域密着型の修学旅行の構築に力を入れていかななくてはいけないのではないかと思います。

今、私どもで抱えている悩みを2つお話いたします。1つは、修学旅行の行先が集中してしまうということです。行先が分散化しないことにはなかなか難しい問題かと思えます。

現に今、国内の修学旅行では、沖縄が大変人気があり、沖縄に行く学校がたくさんございまして、私どもでもぜひ生徒にこれを提供したい、これをやっていただきたいというようなプログラムもたくさんあるのですが、余りに混雑してすぎてなかなかすべての学校にそういったご案内をすることができないという悩みもございまして。旅行先の分散化をお願いしたいところでございまして。

もう1点は、行先・方面の継続です。今年は沖縄、来年は九州、再来年は東北に行きますなどという学校もございまして。学校の事情もあろうかと思いますが、地域の協力を求めるという意味においては、継続ということをお願いしたいということです。1年ではうまくできないものは2年目には少しくまいて、3年目に花を咲かせるなどという例もございまして。本物に触れる機会を少しでも多く持つような修学旅行が行われることを願っております。

亀井 ことは沖縄、来年は北海道というふうに変えないこと、これも重要なことでしょう。それでは、会場からご発言をいただきたいと思えます。ご意見でもご質問でも要望でも何でも結構ですから、どうぞ。

大澤 （長崎市東京事務所で修学旅行の担当）

第一部で石井先生から長崎の修学旅行の実施に関して報告いただき、また第2部のシンポジウムでは野原先生から原爆資料館を駆け抜ける高校生たちというお話をお聞きしまして、大変感銘を受けました。ありがとうございます。

今、先生方から、いろいろこれから修学旅行に望むものということでお話をいただきました。

私ども、本日も入り口のところにパンフレットを置かせていただいた各自治体さんも含めてお聞きしたいのではないかと思います。受け入れ施設ですとか、各自治体に求めるもの等、ご要望がありましたら、お話をいただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

亀井 ありがとうございました。極めて重要な問題ですので、これはまた最後のところでご発言いただきたいと思います。

はい、どうぞ。

黒柳（名古屋市立伊勢山中学校長）

今日のお話、大変参考になりました。それから、修学旅行を受け入れる側の方からのお話を聞きまして、なるほどなど、大変勉強になりました。ありがとうございました。

私も修学旅行については、いろいろ悩むことがあるのですが、一つは体験学習を見直さなければいけないのではないかと思います。体験学習というものにずいぶん力が注がれるようになってきたのですが、ややもすると体験学習ありきで、終わってしまうような形が見受けられます。

体験学習をすることには私も賛成ですが、事前学習と事後学習が大事だと思います。事前学習で、その体験ではどういうものが大切かという、要するに修学旅行のテーマがやっぱりなければいけないと思っています。テーマ、これは1年ではなかなかできないので、例えば校長として担当するならその3年間、また、学年が変わるにしても引き継ぎの中でこういう修学旅行にしたいというものを持っていきたいと思っています。学校として一貫したテーマがあると、それがやがて体験学習もそれにマッチしたものになっていくのではないかと思います。

思いつきのような形の体験学習では、先ほどの話のような軽い体験学習になってしまいます。3年なら3年、5年なら5年という積み上げがあってこそ説得力とあります。納得のいく修学旅行の結びつき、思い出に残る修学旅行になると思います。学習、そしてルール、そして思い出と、きょうの発表の中に3つ入っていましたが、そういうものも加味した修学旅行にすることが大事であろうかと思います。

そして1年から3年までの3年間でうまく総合学習につながる修学旅行ができればいいですね。積み上げた修学旅行を行うことと体験学習の見直しが今は大事じゃないかと思っています。

亀井 事前準備とか、体験とか積み上げ学習とか、具体的に修学旅行をやろうとするときに、現在の教育課題と絡めてのご発言ありました。ありがとうございました。

多摩市立落合中学の井坂先生どうでしょうか。先生の学校の修学旅行の様子のご紹介もしていただいて、その上でご感想なりと思いますけれども。

井坂（多摩市立落合中学校教頭）

本校では今年度までは、今まで子どもたちに自分たちの日本の歴史を知るということで、総合学習の中で事前学習を積み上げ、それを発表させます。京都、奈良方面を実施して今は、事後学習でそのまとめの発表をやっているところです。昨今の経済事情だとかいろんなことを考

え、そして子どもたちの日常の生活や学習の延長の中に修学旅行を位置付けられないものかということを検討してまいりまして、来年度から子どもたちが日常の英語の時間の英語学習、それから日本を知るという自分たちの身近かな学習、そういった事前学習の積み重ねをし、国内にありますブリティッシュヒルズという場所に行き、そこで英国留学を修学旅行の形でやりたいと考え、今試行錯誤しているところです。

試行錯誤の事前学習の中で、業者の方々をお願いしたいなと思うんですが、業者の方々はこの分野について余り得意ではないんですね。資料が少なく、全く資料の提供のご協力が願えない。したがって学校独自で、今いろんなところの開発をしているところです。海外を回ってくるアップイズピープルの方々との交流だとか、そういう大きな国際交流も重ねて、子どもたちにいかに毎日の中での世界の中の自分たち、そして英国の文化に触れる、そういうふうな新しい試みをどのようにつくり上げて成功させていくか、今、悩みながら試行しているところです。

亀井 ありがとうございます。修学旅行というのを日常的な教科等の学習活動とは切り離れた形の特別なある意味では広い意味、あるいは積極的な意味での遊びの時間というふうにするのか、それともただいまご発言のように、日常的な学習の延長に置くとするのか、この辺はひとつ議論となるところだと思います。今の多摩の中学では、日常的な学習の延長にこの修学旅行というのを置きたいと。これは最近の学力問題、あるいは学習時間の確保の問題等、恐らく教頭先生のところには厳しくそういった声が迫ってきていると思いますので、当然の一つの選択肢だとは思いますが。

それからもう1点は、そうなってくると計画が非常に厳しくなるので、アウトソーシングをする可能性が出てきているわけですね。現に総合的学習の時間でさえも、新聞報道によればアウトソーシングでもって、その企画をお願いするということが報道されております。修学旅行をアウトソーシングして、業者に頼むと。学校のカリキュラムデザインを、外部の人をお願いするというふうな選択肢が出てくる可能性、あるいは業者の方にはそれを受け入れる構え、能力の蓄積がきつと着々とされつつあると思いますけれども、ちょっと井坂先生、その辺はどうお考えですか。そのアウトソーシングについて。

井坂 基本的には学校が主体でありたいと本校では思っております。ただし、学校で持っているノウハウだけでは限られておりますので、修学旅行等の専門家である旅行会社の方々のお知恵をたくさん借りたいと思っています。

亀井 わかりました。その点も含めて4人の方にご発言いただきたいと思います。

それでは新山先生から。



新山 先ほど申し上げました地域間交流の研究会ということですが、修学旅行でも活用して日常と異なる地域で体験活動を行わせるという取り組みの中で、しばしば発言のあったお言葉に感性をはぐくむことが大事だというお話が出ておりました。その研究会の委員から紹介された実践は、強い好奇心を刺激することによって、感性をはぐくむことができるのではないかとということで、実践をされたということでございます。

1つは読書指導で、2つ目が教科指導ということですが、ここで必要な基礎知識をきちんと指導して観点を指導すること。観察の観点というのを指導すること。それから3つ目が、やはり生徒自身による事前の研究ということですが、自分たちの関心のあるテーマで共同研究を行わせたという実践の報告がございました。

好奇心の刺激、感性を磨くということが、学びを深めて、それがやはり修学旅行というものにつながっていくのではないかとということです。事例としましては、世界一のいかだをつくりたいとか、災害に強い街づくりをしよう、学校に森をつくろう、苗木を地域間交流の受け入れ先から持ってきて、自分たちの学校に植えていくという活動など、ユニークで意欲的な取り組みも紹介されています。

そういう意味では児童生徒が主体的に取り組む場面を、やはりつくっていただきたいなと思っているわけでございます。ともすると体験だけさせ、その体験の内容を詰め込みすぎて時間に余裕がない計画ではやはりよくありません。児童生徒が主体的に創意工夫をする機会を作ったり、体験内容の精選をしていただきたいということをお願いしております。

研究会で発表された実践事例は、事前の視察で子どもたちに行かせたという事例がございます。そこで自分たちが課題意識を持ち、向こうに行ったときの活動を組み立てさせたり、また例えばただカレーをつくって食べるということではなく、自分たちが好きな献立をつくって、地域の素材を生かしてつくらせたりして学びを深めたという実践でした。

亀井 野原先生、お願いします。

野原 最初の長崎の大澤さんのお話ですが、私ども中学校が数年前に、長崎でいろんな商店とか小さな工場とかに生徒がバラバラに入ってそこで体験をさせていただくということがございまして、そのときも随分地元の方々、市の関係からご協力をいただき感謝をしております。

この問題は、1つはやはり親切にしていだける自治体なり、あるいは地元の団体があるけれども、逆にまたそのことが非常にご迷惑になるだろうということで、学校としては余り続けるわけにもいかないな、という反省があったりし、この辺は学校としても非常に悩むところでございます。

修学旅行に農村に入ってそこでいろんなことをやるということがあった時期があり、それが

非常に流行した時期がございましたけれども、これなんかもやっぱり相手のあることでありまして、学校は生徒のためにいいことだと思って農村の農協などをお願いするのでしょうか、農村に子どもたちを入れていただいて、何時間かそこで農作業を手伝う。実際は手伝うのか邪魔するんだかわからないんですけども、結果的にはどうも相手の方からだんだん嫌がられてしまって、相当下火になったという側面も出てきているわけです。体験学習をやる場合にやっぱり自分たち学校の立場だけでものを考えちゃ困るんじゃないか。やはり相手があり、その相手に対してどういう影響があるのか、あるいは迷惑をかけるのではないかというようなことを、相当慎重に考えないといけない。体験学習というのは余り軽々しく考えてもらってはまずい。その辺を見直す必要があるという、2番目の方がおっしゃったところとも通じるのではなかろうかと思っています。

いずれにしてもさっきのお話のように積み上げて、どういう体験が必要なのかというテーマを十分検討した上でやらなければいけませんし、毎年思いつきでポンポン変わるというのも当然よくないわけでありまして、学校としての方針と考え方というものをある程度継続したものでなきゃならんというのは、おっしゃるとおりだと思います。

それから、井坂先生の話に関して言えば、やはり私は修学旅行というものを日常的な学習と切り離れたものではなく、やはりその延長線上で考えるべきものだと思っています。

いろんな教科の中で修学旅行のいろんな問題について考える。それは、その授業の中に特別に修学旅行のための項目を入れるのではなくて、通常のいろんな授業活動の中でそれに関係のあるところに少し重点的にやるというふうにやっていけば、決して全体の学習の流れを邪魔するようなものにはならないと考えます。そういう意味で、やはり延長線上に置きつつ、なおかつ全体の授業とのバランスを考えるとということが、学校としては重要なのではないかと思います。

それから計画についてはおっしゃるとおりで、非常に今、経済状況が厳しい中で高いお金をかける旅行というのは難しいということがございますけれども、しかし、簡単にアウトソーシングしてしまうということについては、私は余り賛成ができない。やはり業者と学校とがどれだけ十分話し合いをしながら、自分たちの考え方を実現できる方向へ持っていくかというところで知恵を使うべきであって、どうも難しいから業者に任せてしまうというやり方は、私はやっぱりとるべきではない。あくまでも学校が主体でなければいかんと思います。

亀井 ありがとうございます。

両先生からお聞きした時点、ちょっと感想申し上げますと、例えば新山先生からは、感性というお話がありました。私も読書と絡めて、感性というのを考えているのですけれども、修学旅行での感性という問題についてお聞きしたいというのが1つと、地域の産業、商業、農産

業、農工業等々やったり、あるいは近代的な例えばスーパーマーケットでちょっとお手伝いするとか、あるいはアントレプレナーというようなことが、一斉に今、流行しつつありますので、こういうのを修学旅行と絡めようという動きが当然出てくると思います。文部省でも職業教育の重要性ということをおっしゃっており、キャリア教育の重要性も言って、職業体験の意義ということも言っておられますし、この辺のところも、またできればフロアからご発言いただければと思います。

宮地先生、吉田先生、よろしくお願いします。

宮地 初めの長崎市の方からのお話で、受け入れ施設とか自治体ができることについてですが、修学旅行というのは学校とそれから旅行社も入るでしょうが地域との共同作業化と思うんですね。そのときに、例えば学校だけでは地域のことはわからないことがたくさんあると思うんです。ですから地域の方のいろんなノウハウなり、あるいは知恵なりを借りなければいけない面がある。知恵を借りることによってより充実した修学旅行になると思うので、そういう方を紹介をするとか、あるいは市役所が直接でなくてもいいんですけども、そういう組織を紹介するとかが必要ではないでしょうか。

私は有限会社ですけれども、相談があれば、別にそれが仕事にならなくてもご相談には乗りたいと思っています。国のビジターセンターというのもありますし、博物館もありますし、その学校側の要望に応じてこういうことが知りたいということがはっきりすれば、それに対して、相談するところを自治体なり、あるいは観光協会なりが、中継ぎをやっていただけるといいんじゃないかなと思います。

もう一つ、体験学習に関してですが、修学旅行ではないんですが、私が前にいたところ、ビジターセンターですが、そこでは大学生の実習の受け入れをやっていました。国立公園の管理の現場の仕事をやっている職員がいるんですが、それをそのまま体験してもらうんですね。学生が来たから、1時間ぐらい掃除やごみ拾いを実際職員と一緒にやって、半日、1日、ごみ拾いや看板の塗り替えをやる。これをやって、本当に役に立つという経験をしてもらう。そういうことをやっていたんですけども、修学旅行でも本当に何か役に立ったんだという実感できるところまでの体験をやっていけるような体制ができるといいかなと感じます。それはさっきお話が出ていたように、例えば農業体験であれば、農家の方については迷惑であれば、そういうところは避けてもっと別の必要としているところがあると思うんですね。そういうところに振り向けるとか、やっぱりそれはどうしても間に立って学校と地域との情報交換をうまくするというところが必要だろうと思います。

亀井 では、吉田先生、お願いします。

吉田 長崎市の大澤さんの方からご質問いただきました「受け入れ施設に求められるものは」ということがありましたけれども、少し体験的なこととは外れてしまうかもしれませんが、私の印象では今の生徒さんは大変厳しいと思います。

先ほど金森社長の方からもお話ありました、例えば食事のことで言えば、冷めたみそ汁は絶対飲みません。我慢して飲まない、もういらぬという発想があります。見学地についても、やはり興味はないものはなかなか見ない。もしくは資料館の中ではあけておけばいいでしょという発想では、これは見てもらえない。だんだん生徒さんの見る目も厳しくなってきたなという感じています。少しずつ改善する必要があるかなということ、日ごろ修学旅行に同行しながら感じております。

また、先生からご質問ありました事前学習、事後学習の件でございますけれども、これにつきましては、私どももここ数年、事前学習の必要性、事後学習の必要性は強く感じております。

本社でもそういったご案内の冊子等もつくっております。ただ、先生に痛いところをつかれてしまいました。ただ、まだまだ私ども、旅行会社の社員にそういった面での認識が足りない、もしくは勉強不足の部分も多々あるかと思っております。これにつきましては、早急にまた私ども旅行会社という立場でも旅行の当日だけではなくて、前も後もおつきあいができるような形をつくっていかねばいけないなという感じをしております。

亀井 ありがとうございます。

ここでもう1人、先生からご発言いただきましょう。相模原市立旭中学校の田中伸一先生。よろしくお願ひします。

田中 相模原では、1校ほど東北に行っていますが、ほとんどの中学校は京都、奈良に修学旅行専用列車を利用して行っています。各校で工夫をしながらやっている中でその1つは、去年はホテルを使いました。先ほどスイートルームのお話が社長さんの方から出ましたが、朝の食事関係も含めて、今までと違った形になり、非常に子どもたちが盛り上がりました。

それから、少人数の形の動き方というので、今まで班別という形で体験をやっていたんですが、それも変えてさらに少人数で動けるようにしました。特に京都で染め物だとか、清水焼だとかいろんな体験の場所を決めますが、そうすると時間にとらわれてしまうから、もっと別な形で体験をと考えているのが、今の現状です。もっと子どもたちが自由に1日うまく使えるような形でもって行動ができればと計画を立てていこうと考えています。

亀井 ありがとうございます。田中先生には、私の方から1つ質問ですけれども、小グループで現地でいろいろ調査なんかするときには、一種の現地の人とやり取りがあると思うんですよ。ところが最近の日本の学校教育では、学校以外の人との接触は極力安全を維持するため

に避けなさいというふうに指導しているのが多いんですね。その辺の矛盾はどうなさいますか。  
田中 以前は学校から電話をかけさせて、向こうの方を紹介していただきながら進めたことがありますが、そこら辺がうまくできていません。安全面とは別になりますが、ちょっと段取りがうまくいっていないだけかなと思っています。

亀井 ありがとうございます。日本で民俗学をやった学者は、見ず知らずのところへ行っ  
て、その晩から泊めてもらい、密接に交流し、そして実感でもってつかんでくる。これが日本  
の民俗学の手法であったわけで、その手法が今、この治安の悪化状況の中でとり得なくなっ  
ているというのを、これはもう学校では解決できない。日本社会全体の重要な課題だと思います  
けれども、本来なら見ず知らずの人と親しく話し合えるそういう環境を一刻も早く回復しないと、  
日本の将来は非常に厳しいんじゃないかなと個人的には思っています。ありがとうございました。

それでは今までの総括を吉田先生の方から、よろしく。

吉田 ここまで体験学習についていろいろなお話がありました。体験学習というのはもちろ  
ん先生方も皆さんも御存じのとおり、手を動かすだけ、そこに飛び込むだけが、体験学習だと  
は私も思っていない。見ること、聞くことによる体験学習もあろうかと思えます。まとめに  
はならないかもしれませんが、1つだけ印象に残っていることをお話し申し上げたいと思いま  
す。

平成7年に阪神大震災がございました。その後、私は生徒さんと一緒に平成8年、1年半  
後に神戸に行きました。生徒たちは実際の地震で起きた災害、その死者の数等々は、皆さん頭  
に入っていたと思います。しかし、そこで、実際にその復興ボランティアのリーダーをやられ  
た方の話を1時間ほど聞く機会ございました。朝一番ですごく眠い時間でしたけれども、皆さ  
ん、目を見開いて聞いていました。そこで話された話というのは、実際テレビや新聞等々で  
見たことも聞いたこともないような壮絶なお話でした。1時間後に私も先生も生徒の皆さんも、  
全員で泣いていました。

やはりその本物に触れるということが、今生活している環境ではわからないことがたくさん  
あるということを強く感じました。本物に触れるという意味では、今後もこういったことを私  
どもでは提供していきたいと考えております。

亀井 それでは宮地先生。

宮地 修学旅行も旅の一つだと思うんですね。旅というのは、私が最初に経験ということで  
申し上げたように、何が起こるか分からないという面があります。修学旅行でも、例えば自然  
の中に行けば、天気のこと、船が決行することもあります。予定が狂うことは常にあることだ

と思います。それが普通で、それにどうやって対応して乗り越えていくかというところが、また一つのおもしろさだと思います。修学旅行ではあっても、余りこ細かく全部計画を立てたり、基本的な考え方はしっかり持っていなければいけないんですけども、その中で少し自由に泳ぐというようなところがあった方がいいかなと思います。微細にまで計画を立ててそのとおりに、ということではなく、自然というのはいろいろなことがありますので、それに応じてやっていくというようなことができればいいんじゃないか、というのが一つでございます。全部の学校じゃないんですが、先生が非常に細かく世話を焼いたり、指示をしておられます。服装などは、本当に細かく決められているところがあります。また山を歩くのに学生服の詰め襟で来るところもあります。これはかわいそうですね。

例えば日光へ10月に行く場合、気温はこのぐらいになりますよ、天気は悪いときは場合によっては雪が降りますよ、などの情報を与えて、それではどういう服装で行ったらいいのか、自分で考える。あるいは修学旅行委員が考えてもいいと思いますが、とにかく生徒が考える。家庭で親と一緒に考える。そういうように自分で考えて自分で旅をつくっていく。そこから修学旅行が始まるんじゃないかなと感じます。難しい点はあるんだろうと思いますが、なるべく自主性、主体性を重んじてやっていただければいいかなと思います。

それからもう一つ、旅行者の方は学校に競争入札をするという話を聞きますが、学校側とすれば、これは値段の問題ではなくて、むしろ学校側の希望をどれだけかなえてくれるノウハウを持っているかということで、旅行社を選んでいただければいいんじゃないかと。

学校側が主体性をもって、希望はこうなんだということがはっきりしていないと、旅行社の方にお任せになってしまいます。それができるのは、どこの会社ですかということで選んでいただく。多少高くても、選んだ理由があれば保護者も納得するでしょう。修学旅行をそういうことができる旅行社と一緒にやるのが大切だと思います。

亀井 ありがとうございます。それでは野原先生、よろしくお願いします。

野原 体験、体験ということで余りこだわるのではなくて、旅行の中で見る、触れる、感じるということの大事さ、それは歴史であったり、美術であったり、そういうものの大事さというものは、過去も将来も変わりはないだろうと思うんですね。それを減らしてまで特に体験をやらなきゃいかんというのも、また間違った方向に行く恐れがないとは言えないと思います。古くから伝わってきているもの、美しいものを見る、触れる、感じるという、そういうものの大事さを学ばせなくてはいけないのではないかと。

ただ、京都とか奈良へ参りますと、お寺あるいは仏像・庭園とかいろんなものがありますので、余り詰め込みすぎるとは、子どもはかわいそうだと思うんです。それから吉田さんが、先ほ

ど阪神の例で本物の話という話をされました。全くそのとおりだと思います。やはりせっかくいろんな体験なり、状況のお話を伺うとすれば、本当にいい人を見つけることが大事だと思っております。私どもは長崎に前は高校が行っていましたが、高校がパリになってから中学が行っています。長崎とは随分ご縁がありまして長崎の被爆体験の女性の方のお話をずっと聞いておりました。お1人の方に固定しておりましたけれども、これもやはり話の途中から中学生も高校生も寝るのは1人もいない、皆、泣き出すんですね。私も最後には、本当にもらい泣きをした経験が何回かございます。この方は1時間なら1時間の話の中で、戦争は憎い・悪いとか、平和は守らなきゃいかんというようなことは一言もおっしゃらない。ご自分が被爆をして、そのときに自分がどういうふうな経験をしたかということ、実に詳しく淡々とおっしゃる。そのことが逆に非常に子どもたちに感銘を与えて皆が泣いてしまうのです。

それからもう一つは、交通の手段でございます。最近でこそ飛行機を利用される学校が増えてまいりました。20年前に私やはりこの修学旅行のシンポジウムに出たことがありまして、そのときに私は飛行機を利用すべきであるということを申しました。そうしたところ、他のパネリストの方全部から袋叩きに遭いました。うちの生徒は絶対飛行機なんか乗せない。私が目の黒いうちは乗せないなんてことをおっしゃった学校が3年ぐらいたったら乗っておりました。だから私はもう1回同じメンバーでシンポジウムやれと言ったんだけど、やってもらえなかったんです。

交通手段というものも、いかに時間を有効に使うか、そして効率的な旅行をするかということ考えた上で実施すべきものであらうと。飛行機が落ちる確率というのは、それは鉄道の事故の確率とそう大して変わらない。あるいは費用についてもかなりの割引が行われているわけですから、そういうことを考えたら、やはりいかに効率的に旅行をするか、時間をうまく使うかということを考えながらやるべきではなかろうかと思っています。

それから最後に危機管理の問題。これはやはり大勢の子どもを連れて旅行をする中で、一体何が起こるか分からない。いろんな危険を想定して、どういう場合にどうしようかという心づもりを持たなければ、私は学校として引率する資格がないんじゃないかと思えます。

特に海外旅行などを行う場合には、この危機管理の問題というのは非常に大きいわけです。国内だと何かあってもすぐ助けを求められたり、いろんな方法がとれますが、海外に出た場合にそういう言葉の問題、あるいはその国のいろんな救急体制とかあるいは警察の体制というものをどこまで理解し、いろんな危険がある中でこの危機管理というものについて相当の覚悟、そして準備をしていかないと、とんでもないことになるわけです。国内においても同じで、修学旅行をいかに安全に進めていくかということについての準備、手配、そして、その覚悟とい

うものを学校がしっかり持たなければいけないということを申し上げて、バトンタッチしたいと思います。

亀井 では、新山さん、お願いします。

新山 先ほど野原先生が言われたとおり、文部科学省としても、修学旅行については、1つは低廉な額で実施していただくことをお願いしているということと、あとは安全確保ということを基本的にお願ひしております。

先ほど受け入れ地域の話がございましたが、我々が農水省と地域間交流みたいな形の研究会でのお話として出たのは、そういうマッチングは基本的には口コミとか、役所からの紹介とか旅行会社からの仲介というふうなことが多かったです。事例の多くはほとんどの学校側が個別に受け入れ先を探したということでございます。

したがって旅行会社とか受け入れの地域の方々には、学校から出される教育的な希望をなるべく尊重していただきたいと思います。そういう働きかけがあるということは、こういうことがやりたいということでもありますので、ぜひそれを尊重していただきたいなと思っております。

ただ、学校側も結構わがままでという話も聞いておりまして、例えば農山漁村の体験をしたいときに、稲刈りをやりたいとか田植えをやりたいとか、もう時期が限定されてしまう。それからまた、この時期しか逆に行けませんというふうにはっきり言われる。学校の日程を優先して言うてくるようなことが多いというようなことがあるということです。その中で学校側としては、教育的な課題、学習課題を持っておりまして、可能な限りそれを尊重していただいて体験活動の内容とか、行程を組んでいただければありがたいと思っております。

そういった意味では受け入れ側については、特定の時期以外のこの時期しかできないような体験活動だとかはやはり重なるという話がありますので、なるべく時期を分散していただく。通年で体験活動のプログラムを組めるように工夫をしていただければと思っております。

学校側と受け入れ側で共同体制がうまくとれるようにしないと大変です。具体的には下見の時期、体験プログラムの行程の決定だとか、場所、指導者の確保、救急体制、体験活動終了後の交流のあり方、それから先ほどもあったような継続への取り組みが具体的にスムーズに行えるよう、双方への配慮を旅行会社の方々にもお願いをしたいと思っております。

先ほど事前指導、事後指導が大事だという話がありまして、研究会の中でもそういったお話は出ております。特に事後指導が大切であるということが言われておりました。事前指導については、子どもたちが創意工夫して臨機応変な対応ができるような形で実施していただきたいという話がありました。

事後指導ということについては、やはり地域との関連性です。学校、児童生徒側が指導を受



ける側という一方向的な関係でなく、双方がお互いに教え合うという形にした方が学習効果があがるという発表もございました。

つまり学校で学んだことを地域の方々に発表する、こういうことが子どもたちの学びの定着にも結びつくし、地域の方々からとってみても、非常に得るもの大きい。つまり教えるだけという関係ではなくて、子どもたちからまた教わる、というふうなことが大事であるということでもあります。

また先生同士の学び合いということもぜひ体験活動の中で取り組んでいただければありがたいなと思っております。

亀井 ありがとうございます。日本列島を飛行機かち見下ろしますと、真ん中に日本海があって、その周りをぐるっと大陸と日本列島が円形を描いているんですね。つまり日本列島というのは、文化の交流の通路になっているわけです。日本人は旅行が大好き、知りたがり屋です。修学旅行は正に日本文化に根づいたものだと思います。ぜひその伝統的な修学旅行を大事にしていきたいと思っております。

本日はフロアからも非常に貴重なご意見をいただきました。それからシンポジストの先生方、大変有意義なご発言いただきまして、ありがとうございました。

大変充実した会が出来まして、厚く御礼を申し上げます。